

# 東北 VALUE SIGHT 山形



最上町役場交流促進課 新産業戦略主幹  
**金田 綾子** (かねた・あやこ)

山形市出身。  
1978年山形大学教育学部小学校教員養成課程卒業。その後、2年間の小学校講師を経て、結婚により最上町に在住。  
80年から最上町役場に勤務し、現職に至る。

最上町産業振興センター  
山形県最上郡最上町大字向町581  
TEL 0233-43-2340・FAX 0233-43-2319  
URL <http://mogami.tv>

地方の人口は減少し、経済も停滞している中、これまで地域内で売り買いしていた特産品を、首都圏をはじめ全国に販売して地域活性化を図っていこうと、自治体や民間事業者などがあの手この手を尽くしている。山形県最上町では、こうした取り組みが今のように活発になる以前より、東京都板橋区からの申し出をうまく活用し、町が主導して地域を売り込む活動を行っている。

## 最上町と板橋区との 連携によるまちづくり

### 全国ふる里ふれあいショップ 「とれたて村」への参加

最上町では、防災協定の締結などで従来より東京都板橋区と連携してきた。そして、その縁で平成16年に同区内のハッピーロード大山商店街が計画した、全国農山漁村生産者と都市消費者とを直接つなぐ試みへの参加協力を相談された。

当町としても板橋区との連携は、地域産品の販路拡大とともに交流人口の増加も期待できるものと考えた。企画段階からこの計画に加わって双方にメリットの高い事業となるよう検討につとめ、平成17年10月に同商店街の中に開店した全国ふる里ふれあいショップ「とれたて村」に出店参加することになった。

### 板橋区とつながることで 地域の活性化を目指す

この「とれたて村」では、全国の自治体と板橋区の商店街とが直接つながることにより、農山漁村で「安心・安全・真面目」につくられた食材を販売したり、都市と農山漁村とが双方向的な交流活動を行うことを第一義的な目的としている。そのうえで都市住民が求めている「ふる里ニーズ」に応え、商店街の価値を高めることを最終目標としている。

一方、最上町としては首都圏のマーケットに直結した拠点を取得することで、販路拡大やマーケティングへの活用の他、観光誘客やシティセールスの拠点とすることができる。そして、当町が目指す「100万人交流」の推進にも寄与できるものと考えた。

平成17年当時、このように地方自治体が直接首都圏に拠点を築き、地域の活性化に利用するという試みはまだ珍しい取り組みであり、先進的の事業の一つとして全国的に注目を集めた。そして、その後を生

まれる「農商工連携」や「6次産業化」という新しい地域活性化の概念にも少なからず影響を与えたのではないだろうか。

### 生産者と消費者の出会い

「とれたて村」での販売は生鮮食料品や加工品、お菓子など、消費者が毎日必要とする食材が中心である。そこで、これらを求める消費者に最上町の魅力を感じてもらうには、真面目に特産品づくりに励む生産者の姿勢を消費者に伝えることが重要だと考えた。そのため、商品供給だけでなく、機会をとらえては商店街を訪れ、直接販売やセールスプロモーションを行う「ふるさとイベント」を実施している。

参加した生産者は消費者と直接コミュニケーションができ、「おいしい」と褒められモチベーションを高められるとともに、味や量・価格などのマーケティングを行う機会として活用している。

このような継続的活動の成果として、生産者の来訪を楽しみにするファンが増え、板橋区民への最上町の認知度と、「とれたて村」での人気度が高まり、常に売上金額トップをキープしている。

### 板橋区民との交流

ハッピーロード大山商店街では「とれたて村」開設の当初から、交流も重要な事業テーマとしてとらえており、板橋区民が農山漁村を訪ねる「交流ツアー」を企画・実行している。

これは最上町の活性化にも活用することができるため、同商店街と連携して自然体験や農家・生産者との交流など、都市住民のニーズに合った受け入れプログラムを整え、交流活動を進めている。

### 学校給食や緊急時におけるつながり

板橋区では子どもたちの食育のため、「とれたて村」参加自治体の農産品を学校給食の食材に使用している。最上町でも年に数回、アスパラなどの特産品を区内の全小中学校76校32,000人の給食食材として供給し、同時に町や食材の情報を提供することで食育活動に貢献している。

また、東日本大震災発生後、福島原発事故の影響により、東京都内で幼い子どもに水道水を飲ませることができなくなったことがある。その際、板橋区から大山商店街を通じ「店からペットボトルの水が消えてしまい、赤ちゃんのミルクもつくれず困っている」と相談を受け、ただちに2万本のペットボトル水を届けている。それにより、区では急場をしのごうことができた。

### 修学旅行生の社会体験

社会体験を通じて子どもたちの学習効果を高めるため、修学旅行で東京を訪れる最上町内の中学生をハッピーロード大山商店街に受け入れていただいている。

当日は店主から直接、接客や販売の指導を受けながら職業体験を行っている。特産品の試食販売や衣装を着けて伝統芸能の上演披露を行うといった、最上町のPR活動も行っている。

板橋区民と触れ合った生徒たちは「最上町って素敵なおとこですね」、「いつも最上町のものを食べています」などの言葉を直接かけられ、自分の生まれ育った町の価値を再認識し、誇りが持てるようになるなど、高い教育効果が得られている。

### 細く、しかし深く長く……

最上町が「とれたて村」に参加してから8年が経過しているが、このような先進的な取り組みにいち早く参加していたことで、6次産業化推進などの地域課題に対処できるノウハウを獲得しておけたことは大きな成果であったと言える。

多くの自治体は特産品販路開拓や観光誘客を唱えながらも、相手が見えず、全国に向けた一過性の出張イベントなど、密度の薄いプロモーションを続けている。それに対して、板橋区に徹底的にターゲットを絞り、密度の濃い「互いの顔が見える」お付き合いを続けることで、特産品販売にとどまらない、さまざまな連携アイデアが生まれ、かつ実現して地域の活性化に成果をあげている。

人口約9,700人の最上町にとっては、人口50万人の板橋区は十分に大きなマーケットである。このようにピンポイントで深く長く続く関係を築くことが、将来の町の発展にとって貴重な資源となることがわかり、この連携で得たノウハウを生かして、首都圏を中心とした他の自治体とも同様の関係を築いていきたいと考えている。



「とれたて村」でのイベントを活用し、地域産品を通じて最上町を売り込む